ラルース家殺人事件

バイバイ、エンジェル

笠井潔

角川書店

バイバイ、エンジェル
笠井 潔

昭和五十四年七月三十日初版発行
昭和五十四年九月二十五日三版発行

発行者 角川春樹
発行所 角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三（二六五）七一一一 大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八 〈郵〉一〇二

大日本印刷・鈴木製本

© Kiyoshi Kasai, 1979 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872252-0946(0)

目次

序章――マドリッドからの手紙――7
第一章―ヴィクトル・ユゴー街の首なし屍体――35
第二章―モンマルトル街の屋根裏部屋――85
第三章―リュクサンブール公園の霧――139
第四章―ラマルク街の真相――193
第五章―ボワ・ドゥ・ブローニュの屍体――225
第六章―サン・ジャック街の悪霊たち――255
終章――ピレネーからの手紙――303

装丁　岡村元夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

バイバイ、エンジェル

――ラルース家殺人事件――

à la renarde

《本書に登場する人物》

イヴォン・デュ・ラブナン　バス・ピレネー地方の旧家の当主。詩人で革命家。二十年前に失踪。

アンドレ・デュ・ラブナン　イヴォンの長男。デュロワの秘書。

マチルド・デュ・ラブナン　イヴォンの長女。パリ大学の学生。

ジョゼフ・ラルース　デュ・ラブナン家の小作人。イヴォンと共にスペイン戦争に参加。戦後まもなく失踪。

ジャネット・ラルース　ジョゼフの長女。トゥールーズで死亡。

オデット・ラルース　ジョゼフの次女。パリのブルジョア未亡人。

ジョゼット・ラルース　ジョゼフの三女。オデットと同居。

アントワーヌ・レタール　ジャネットの息子。パリ大学の学生。

ジルベール・マシュー　アントワーヌと同郷の友人。パリ大学の学生。

クレール　オデットの夫。十年前に自殺。

フロサール　オデットの法律相談人。

デュロワ　クレールの共同経営者。

マルタン夫妻　オデットの友人。

マリー・バルト　ラルース家の家政婦。

ジャック・バルト　マリー・バルトの一人息子。

ルネ・モガール警視　司法警察の警視。

ナディア・モガール　ルネ・モガールの一人娘。パリ大学の学生。

ジャン＝ポール・バルベス警部　司法警察の警部。モガールの古くからの友人で部下。

マチウ・デュラン医師　警察医。

ボーヌ　司法警察の刑事。

マラスト　司法警察の刑事。

ダルテス　司法警察の刑事。

アラン・リヴィエール教授　パリ大学の哲学教授。

矢吹駆（ヤブキカケル）　謎の日本青年。

警官(サツ)どもが犯罪的で
罪人たちが聖者
頭がほんとは尻尾(しつぽ)
そう　おいらは
大魔王ルシファーよ
破るべき禁忌(タブー)が欲しいんだ

ミック・ジャガー作詞「悪魔を憐れむ歌(シンパシー・フォー・ザ・デヴィル)」ト

序章　マドリッドからの手紙

春が来て、私は二十歳になった。

しかし透明な陽光と微風の五月のパリも、去年までのようには私を楽しませない。私は少し大人び、以前のように気軽にはしゃぎまわったり、なにかを単純に決めつけたりはできなくなった気がする。ルシファーの冬の経験が、どこか深いところで私を変えてしまったのだ。

教室では、誰もがヴァカンスの話題に熱中している。まもなく、私も、地中海の浜辺に出発するはずだ。ぎらぎらと白く光る海、真夏の太陽の輝きが、事件のつらい思い出を薄れさせてくれるだろう。

二十歳の誕生日のプレゼントはなんとも豪勢だった。事件以来沈みがちだった私の気を引き立てようとして、パパが贈ってくれたのは、薔薇色に輝く可愛らしい小型シトロエンの新車だった。

前から欲しくてたまらなかったシトロエン・メアリは、私を胸苦しいほど夢中にさせた。特有の柔らかな光沢をもったプラスチック製の車体。そのデザインの華麗な軽みが私を酔わせるのだった。

麻の白いパンタロンと揃いの男っぽい感じのジャケットを軽くはおる。その下は青と白の細いストライプのTシャツだけだ。首にきつく結ぶのは派手な安物の黄色いスカーフ。濃淡は違うけれど同系色の布靴とあみだにかぶった少し大きめのハンチング。

幌を倒しオープンにしたメアリで自動車道路にあがると、青年たちの眩しげな視線が私の横顔を快

く刺激する。髪に絡むやわらかな風に陶然とした私は、青年たちの視線に夢にも似た淡い微笑で応える。郊外の湖に着くのがなんと早いことだろう。

木蔭の下生えに坐り、冷たい水面を渡ってくる心地よい風に吹かれ、私は木もれ陽の瞬きを楽しむ。くつろぎが深まり、心はゆるやかに開いていく。

こんな時だ、なにか暗くいまわしいものが私を把えようと蠢き始めるのは。それはまるで、自信をひけらかすようにして、うっとりと我を忘れた時に襲って来る。私は、いつとはなくもう遠いはずの出来事をぼんやりと考えている自分に気づき愕然とするのだ。驚きにうたれ、冷たくなった日暮れの風に身顫いしてそそくさと立ちあがった私は、足速に車に向かう。しかし、いったん頭のなかに浮かびあがった記憶の魔は、いつだって簡単にたち去ろうとはしない。

ハンドルを握った私は、湧きあがった記憶に屈伏し仕方なく思い出に付き合うことにする。そして、浮かんでは消える記憶の破片、回想の場面の印象に、最初は少し抵抗しながら、次にはほとんど熱中して心を集め始めるのだ。そんな時、まず浮かんでくるのは、やはり去年の十二月の夜のことだった。そう、私にとってラルース家の事件は、あの寒い晩にリヴィエール教授のアパルトマンで始まった。

「ナディア、これを読んでみろよ」

「なによ、それ」私はアントワーヌが指のあいだにはさんでいる一枚の紙片に目をやりながらいった。

「脅迫状さ」とアントワーヌが答えた。彼はいつもの皮肉そうな薄笑いを浮かべていたが、眼は少しも笑っていなかった。

大学はもう休みになっていた。そして、しばらく会っていなかったアントワーヌから電話があった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のは昨夜のことだった。リヴィエール教授のところで会おうという誘いに応じて今日約束の時間に来てみると、アントワーヌはもう着いていた。アントワーヌの他にも、バス・ピレネーの同郷の友人であるというジルベール、それにマチルドがいて、リヴィエール教授を囲んでいた。

家政婦に通されて教授の広い書斎に入ると、アントワーヌは席に着く暇も与えずに私の目の前に一枚の紙片をつき出したのだ。

私は紙片を受けとって目を走らせた。そこには、こんな短い文章がタイプで打たれていた。

〈帰国は近い。裁きは行なわれるだろう。心せよ。I〉

署名代わりに大文字で打たれた赤いIが、まるで白紙に落ちた一滴の血のように見えた。

「……やはり、父は生きているんですわ」マチルドが思い詰めた口調でいった。

「僕には信じられないな」といったのはジルベールだった。

「これがイヴォンの手紙だというのかね」リヴィエール教授がマチルドに念をおした。

私とアントワーヌ・レタールはアラン・リヴィエール教授の学生だった。六十歳を過ぎた現在まで独身を通してきた教授の家には、どこか気楽な雰囲気があって、私たちはこの高名な哲学者の書斎をよく集会場がわりに使うことがあった。銀髪と綺麗な青い眼と四角い頑丈そうな顎をもったこの大柄な老人は、私たちが集まってくるのを少しも拒もうとはしなかった。

ジルベール・マシューは法律家になるための勉強をしていた。マチルド・デュ・ラブナンは演劇科だった。二人ともアントワーヌと同じ村の出身で、私もアントワーヌを通して以前から面識があり、会えば挨拶するくらいの関係だった。そして、死んだはずのマチルドの父親イヴォン・デュ・ラブナンは、リヴィエール教授の古くからの友人だったらしい。

マチルドは白い光沢のある金髪で、気品のある、少し沈んだ翳りが魅力になっている美しい顔立ちの娘だった。いつも地味な服装をしていたが、訓練された舞台女優を思わせる動作や優美な軀つきのため、ただ大学の構内を歩いているだけで男子学生の眼を集めてしまうのを私は知っていた。

クリスマスも近い寒い晩だったが、部屋のなかは暖房で汗ばむほどだった。

「これは二、三日前に叔母のオデットのところに来たものなんです。消印はマドリッドでした。もちろん、差出人の名前も住所もありません。僕は誰かの悪戯だと思うんですが、どうもオデットの態度が変なんです。なにかに怯えているようで」とアントワーヌがいった。

「これがイヴォンの手紙だとして、なぜ君の叔母さんに送られてきたのだろう」教授が不審げにいった。

「それにはいきさつがあるんです。教授は父が最初にスペインに行った時のことを御存知ですね」マチルドの声は真剣だった。

「ああ、今でも忘れられないよ。イヴォンは高等中学でずっと私と一緒だった。パリで学ぶために君たちの山奥の村から上京したのだ。彼の家は没落した古い貴族だったが、子供の教育は首都で受けさせることになっていた。

イヴォンは、快活で美男子で遊び好きで、おまけに途方もなく才気に溢れた少年だった。トム・ジョーンズとファブリス・デル・ドンゴを溶け合わせたような魅力をもった少年だった。彼は古い芸術に対する攻撃的なシュルレアリストであり、ファシストとの街頭衝突をスポーツのように楽しむ行動的なトロツキストであり、そして同時にこの都会が提供する快楽の一切を貪欲に呑みほそうと決意した若いエピキュリアンでもあった。第二帝政に反逆した二つのBが、つまりブランキとボードレールが彼の英雄だった。

もちろん、私たちは親友だった。しかし、スペインで戦争が始まるとすぐに、彼は大学入学資格試

験の受験を放棄してスペインに潜入していった。共和国政府軍に志願してファシストの叛乱軍と闘うためにだ」

「父は夏休みに村に帰ってから、そのまま祖父の猟銃やその前の大戦で戦死した伯父の軍用拳銃を持ち出して出奔してしまったのです。裏山からピレネー山脈を越えてスペインに入ったのですが、一人ではありませんでした。デュ・ラブナンの家の小作人でジョゼフ・ラルースという、もう三人も娘のある男を一緒に連れ出していたのです」

「そのジョゼフというのが僕の祖父にあたるわけです」アントワーヌがマチルドの話を引き継いだ。「ジョゼフの三人娘の長女がジャネットといって僕の母です。次女のオデットと三女のジョゼットが、今パリに住んでいる僕の叔母たちになります」

「共和国側の敗北で戦争が終るとイヴォンはまた首都の学生生活に戻ったが、間もなくドイツとの戦争のために動員され、戦闘で傷ついて捕虜になった」リヴィエール教授は感慨深げな口調でいった。「しかし彼は捕虜収容所を脱走するとそのままパリに潜入して、地下抵抗組織に参加しその指導者の一人になった。抵抗運動の任務から解放され、彼が故郷に帰ったのは戦争が終った翌年のことだったはずだ」

「そうです。しかし父がいないあいだ、村ではちいさな事件が起こっていたのです。ジョゼフはスペインから村に戻ると、デュ・ラブナン家の持ち山のひとつを父から贈与されたと主張しました。老いた祖母が一人残っていただけのデュ・ラブナン家は空家同然で、書類だけは整っているジョゼフの主張に反対する者もありませんでした」とマチルドがいった。アントワーヌが話を継いだ。

「ジョゼフがパリからクレールという鉱山技師を呼んだのは戦争の終ろうとする年のことでした。彼は手に入れた山に鉱脈があると固く信じていたのです。ところが、翌年のある晩ジョゼフは突然に原因不明の失踪を遂げてしまいました。そして、村人が誰も信じなかった鉱脈はたしかに発見された

のです。終戦の翌年、僕の叔母のオデットは妹のジョゼットを連れて上京し、鉱脈の権利を持参金代わりにしてクレールと結婚しました。長女のジャネットは、まだ稚かったいちばん下の妹の養育の責任を負うことを条件に、鉱脈の権利を全部妹夫婦に譲ったということです。ジャネットはそのまま村に残り、レタールという青年と結婚して僕を産んだのですが、夫の事故死のあとトゥールーズに働きに出たままそこで病死したそうです。稚い時に両親に死に別れた僕は、そのまま父方の伯父の家で従兄弟たちと一緒に育てられ、母方の叔母たちに初めて会ったのはパリの大学に入った時でした」

「戦争が終った翌年にイヴォンは故郷に帰った」リヴィエール教授は確かめるようにいった。「レタールの叔母たちがパリに出てきたのもジョゼフが失踪したのも同じ年だね。問題は……」

「そうです、問題は」マチルドが急き込んだ声で口を挟んだ。「帰ってきた父とアントワーヌの叔母たちが村で一緒になる時間があったかどうかです」

「それが、あったのです。マチルドの父親が帰ってきたのは一月、ジョゼフが失踪したのが二月、そしてアントワーヌの叔母たちが村を出たのはその年の三月だったのですから」ジルベールが初めて口を出した。

「教授、私の考えていることがおわかりでしょう」といったマチルドの口調は真剣だった。「十年ぶりに帰郷した父とオデットたちの父親とのあいだに、例の鉱脈の所有権をめぐってなにか諍いがあったのかもしれません。そしてオデットたちが父の主張を無視してパリに出ていったのだとしたら、彼女たちがこの手紙に怯えたりする理由もはっきりするわけです。父が生きていて、昔の財産問題が蒸し返されるのを、彼女たちは不安に思っているのではないでしょうか」

短い沈黙のあと、教授がおもむろに口を開いた。

「マチルド、君はお父さんのことを知らないから、そんな風に考えたりするのだ。君の父親は、実に誇り高い魅力的な青年だった。片々とした財産問題で、二十年もたってから他人を脅迫するような

性質の男ではない。マチルド、イヴォンの経歴を考えてみればよい……」リヴィエール教授はマチルドの眼を正面から見つめて強い口調で語り続けた。「イヴォン・デュ・ラブナンは高等中学の生徒だった時から『革命のためのシュルレアリスム』誌の同人だった。イヴォンが詩を書いて発表すると、それは首都の作家や批評家たちのあいだに熱烈な讃辞の渦巻を呼び起こした。ランボーの再来、という声すらもが、その渦巻のなかから聴こえてきたものだ。ランボーがパリ・コミューンを発見したように、イヴォンはスペイン革命を発見したのだろう。そして彼は、ためらいもなく頭から革命の坩堝に跳び込んでいったのだ。ピレネーの山麓でファシストの軍隊と死闘を繰り返したローザ・ルクセンブルグ大隊の、彼は最年少の兵士のひとりだった。

しかし、彼から詩を奪ったものが、革命の敗北の経験であったのか、青春の終りの自覚であったのか、私にはわからない。とにかくイヴォンは、自分をアフリカの砂漠に追放する代わりに、非合法の地下生活というもっと陰惨で苛酷な人間の砂漠の奥深く一直線に入り込んでいったのだ。戦争が終り、私たちが平和と解放の気分に酔い痴れていた時、抵抗運動の指導者という経歴がもたらしたはずの地位や名誉の一切を惜しげもなく捨て去って、彼は単身故郷に帰っていった。その時駅まで見送りにいった私に、彼はこういったのだ。

『アラン、戦争はまだ終ってはいない』と。

イヴォンの顔は暗く厳しかった。故郷の村に戻ったのは、スペインで続けられている地下抵抗運動に参加するためだった。彼は国境地帯に、スペインの抵抗者を支援する後方基地を組織した。そして今から二十年ほど昔、イヴォンは組織上の任務で、山を越えスペインに潜入していったが、予定の期日が過ぎても帰ってこなかった。いや、二度と帰ってはこなかったのだ。私や友人たちは様々に手を尽してみたが、なんの効果もなかった。スペイン側の公的な記録には、イヴォンの逮捕も投獄も裁判も処刑も、なにひとつ残されていない。おそらく、非公然のまま処刑されたのか、あるいは裁判もな

しに投獄され獄死したのだろう。今となってはそう考える以外ない……」

「でも、二十年間牢獄のなかで生き延びたのかもしれませんわ」マチルドは弱々しくこう反論して唇を噛んだ。

「……可能性は、ある。しかし、他の例から考えて、やはりもう生きてはいないと判断すべきだろう」リヴィエール教授の口調は重かった。「マチルド、どんなちいさな可能性でも信じたいという君の気持は理解できる。しかし、イヴォンのように勇敢で高潔で誇り高い男が、多少の金銭のことで他人を脅迫するなどということはありえない。もしも獄中から手紙を出せる機会があったのだとしたら、その相手は娘の君や親友の私でなくてはならないはずだ。マチルド、気の毒だが、この手紙がイヴォンのものだなどとは考えられない。君もそんな考えは捨てた方がいい……」

しばらく沈黙が一座を覆った。マチルドとリヴィエール教授の話のあいだ、アントワーヌはからかうような薄笑いを唇の隅に浮かべていた。ジルベールを見ると、彼は痛ましげに顔を曇らせていた。

アントワーヌは痩せて背が高く、繊細な顔立ちをしていたけれど、どこか反抗的で不真面目な態度をとるのが自分の義務だとでも考えているようなところがあった。ジルベールは中背のがっしりした軀つきで、無骨な髭面に似合わぬ優しい性格の持ち主だった。その落ち着いた人柄のために、アントワーヌよりもずっと歳上に見られることが多かった。

「アントワーヌ」と私は声をかけた。「あなたの叔母さんの誕生日、たしか来週だったわね。できたら私も招待してもらえないかしら」

「いいさ。ジルベールもマチルドも来るし。君を紹介すればオデットも喜ぶよ」

私はリヴィエール教授やマチルドの話に強い興味を抱いた。それにあの脅迫状のこともある。アントワーヌの叔母たちに会ってみたくてたまらない気持になった私は、たちまちそのための手筈を整えてしまったのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com